

## 〈夢千代日記〉における

# 原爆・白血病・吉永小百合

石川巧

はじめに——〈夢千代日記〉の背景

早坂暁原作・脚本の「夢千代日記」は、NHKドラマ人間模様のひとつとして昭和五十六年二月十五日から三月十五日まで五回連続で放送された。夢千代こと永井左千子は、五年前に亡くなった母のあとを継いで、山陰の鄙びた温泉場で芸者置屋「はる家」を営んでいる。だが、夢千代には周囲の人間たちに知られたくない秘密があった。彼女は、広島に投下された原子爆弾で胎内被曝したことが原因と思われる白血病を患っており、半年ごとに通っている神戸の医者からも「あと三年」の命と宣告されていたのである。作品は、身体が病魔に蝕まれていく苦痛と恐怖に怯えながら、限られた時間を精一杯に生きようとする夢千代を中心に、それぞれが様々な事情をかかえている「はる家」の芸者衆や街に流れている人間たちが引き起こす事件を描いている。

また、「夢千代日記」というタイトルからもわかるように、この作品では、彼女の日記が重要な役割を担っており、視聴者はその日記が綴られる場面での独白ナレーションを通して彼女の本

心に触れることになる。夢千代自身が、「……わたしは、半年に一度ずつ、表日本の病院へ出むいております。わたしのつけている日記は、病床日記といいますか、毎日の体の工合をつけているものです。ですから、半年ごとに病院へ行くたびに、日記を病院へ置いてきます」と述べているように、日記は原爆症の治療に役立てるための闘病日記として記されているわけだが、このナレーションには、いつも気丈にふるまう芸者・夢千代が左千子というひとりの女に戻る瞬間が託されており、その偏差がもたらす哀切感、および、語りの二重性にドラマの見どころがあるといってもいい。

「夢千代日記」は、放映当初から平均二十%以上の高い視聴率を記録し、吉永小百合が演じる夢千代も幅広い層から支持されたため、NHKはシリーズ化を決定。翌、昭和五十七年には「続・夢千代日記」（1月17日〜2月14日、連続5回）を、同五十九年には「新・夢千代日記」（1月15日〜3月18日、連続10回）を放映する。また、昭和六十年五月に東映が「夢千代日記」監督・浦山桐郎、脚本・早坂暁、主演・吉永小百合として映画化した際、テレビドラマでは慎重に回避されていた夢千代の死を描いたことで、シリーズとしての展開にひとつの完結性が与えられ、それ以後は、多くの女優が舞台で夢千代役に挑んでいる<sup>1)</sup>。したがって、本稿ではテレビドラマ、映画、舞台を区別し、テレビドラマとして表現された作品「夢千代日記」、「続・夢千代日記」、「新・夢千代日記」三作を〈夢千代日記〉シリーズとよぶ。

〈夢千代日記〉シリーズを考えると、まず確認しておかなければならないことがある。それは、一般的なドラマが脚本をもと

にキャスティングを決定していくのに対して、(夢千代日記)シリーズは、あらかじめ吉永小百合を主人公にすることが決まっております、彼女の身体性およびイメージを最大限に活かすことを目的に書かれているという点である。——吉永小百合から「(自分のために)何か書いてほしい」という申し出があったとき、早坂は、「小百合さんが芸者になったら綺麗だろうなあ」と思いつつ、「あんなに綺麗な人がただの芸者ではつまらない」という難しさも感じたという。だが、彼女が昭和二十年生まれだと知った早坂は、とっさに自分の広島体験を想起し、それを投影した物語を書こうと決意する(「私の人生に重なる『夢千代』の姿」、「花も嵐も」昭63・11)。

昭和二十年八月六日、十五歳の早坂は海軍兵学校予科生「同校最後となる七十八期生」として山口県防府市におり、「赤痢のようなものにかかって」病室に入っていた(「被爆電車」『へんろ曼荼羅』創風社出版、平17・4)。原子爆弾の炸裂から「数時間後」、兵学校に「ものすごい新型爆弾が広島に落ちたらしい」という第一報がもたらされる。翌日には物理の授業を担当していた教官から、その「新型爆弾」が原子爆弾であることを説明され、「どうやら、広島は消滅したらしい……」(「雨の日は好き」、「ミセス」平3・9)という噂をきく。

その二週間後、敗戦により除隊となった早坂は故郷の松山に帰るために貨物列車に乗りこみ、乗り換え地点となる広島駅で恐ろしい光景を目撃する。彼はその体験を、「昭和二十年八月二十三日の夜、何千、何万という死体から、暗く青い燐光が燃えていた。／原子爆弾が落ちたのは八月六日の朝。あれから十七日もたつて

いるというのに、十数万人の遺体は懸命の収容、焼却にもかかわらず、まだ恐るべき廃墟のなかに数万人を残して放置されていたにちがいない。／だから、数万という燐光が燃えていたのだ。／列車が広島に着くずっと手前から、異様な臭いがボクたちの鼻腔に漂い、近づくにつれて耐えがたいほどの臭いが列車内に充満した。あれは数万の死者の、真夏による腐臭であったんだ」(「ピカドン」、『花へんろ風信帖』新潮社、平10・10)と記している。

だが、のちに実家に戻った早坂を待っていたのはさらに大きな衝撃だった。彼は、血のつながっていない妹の春子が、自分を訪ねるために防府に向かっている、ちょうど原爆が炸裂したとき広島駅周辺にいたことを知る。この春子と自分との間にあった濃密な感情について、早坂はいくつかのエッセイに記しているので、ここではそのひとつを引用する。

……私が四歳のころ、家の前に赤ん坊の捨て子があった。遍路みちに面した商家であつたわが家には、よく捨て子が置かれてある。一、二年して母親が引きとりに現れるのが常だけれど、春子の場合、ちがった。三月に家に来たので春子と名をつけたのだが、結局わが家の子として育てたのである。

／赤ん坊の時から、春子は私と一緒に寝て、末っ子の私も可愛い妹ができたことが嬉しくて、ほんとうの兄妹のようにして大きくなった。／春子が捨て子であることは絶対の秘密で、店の者にも、近所の人にも念を押して隠し通してもらった。／戦争が激しくなつて、私は海軍兵学校へ入校することになった。まだ戦場へ行くのではないが、空襲の激しい中で、長

い別れが予想される。／「お兄ちゃん……」／春子は私のことを、そう呼んでいた。女学校に入ったばかりで、大柄で色の抜けるように白い綺麗な女学生であった。／「元気で帰って。死んだりしたら、いや」／母が私を呼んだ。／「お前は春子が好きかえ？」／私は春子が好きだったが、答えられない。／「ほんとに好きじゃったら、兄妹でないことを言うてやらにや、いけん」／「どうして？」／「あの子も、お前の方が好きらしい。ほんとに好きらしい」／「戦争で死ぬかもしれないのに、そんなこと……」／「死ぬかもしれないから、ちゃんとしとかにや、いけん」／私は、母にまかせて海軍兵学校に入校した。八月はじめに、春子が面談に来るという手紙をもらった。空襲の激しい時に面会などに来るなど手紙を出したが、入れちがいのようにして、春子は瀬戸内の連絡船で広島へ渡ったのだという。／「なぜ、春子を出したんだ」／私は帰郷してから、母をなじった。／「どうしても、あの子がお前に会いたいと言うて……。会うて、どうしても話したいことがあると言うもんだから……」／母は、春子が捨て子であることを話したそう。だから、お前はお兄ちゃんをほんとに好きになっても、ちっとも構わんと言ったんだそう。春子は、ひどく驚いて長い間母を見つめていたという。／「でも、春子は嬉しそうだった。お前のことをほんとに好きになってもええと分かって、ほんとに嬉しそうだったよ」／春子は私に何を告げたくて、空襲の激しい中を防府に向かったのか。／それっきり春子は帰ってこなかった。日付けからいって、どうやら春子は広島駅で防府に向かう列車を待つ

ているうちに、八月六日の朝を迎えたにちがいがなかった。／父も母も、広島へ春子をさがしに行ったが、数十万人の死傷者の中から、春子をさがしだすことはできなかった。

（早坂暁「時計は溶けて」、『へんろゝ曼荼羅』前出）

捨て子だった妹に愛情を注いで育てた家族。血のつながらない兄妹の間に芽生える恋心。生きて帰れるあてもない海軍兵学校への入校。戦争末期のどさくさに起因する手紙のすれ違い。そして、原爆投下の時刻に合わせたように広島に向かい行方不明になった妹……。この体験談は、それ自体がすでに濃密なドラマ性と鮮烈なカタルシスを備えている。ドラマがあまりにも見事に完結しているため、原爆の恐ろしさやひとりの人間の死がもたらす悲壮感がどこかに吹き飛ばされている印象すら受ける。

早坂自身も、シナリオ作家となった自分の原点はこの出来事にあるという確信をもち、人間の哀感を届かなかつた言葉⇨空白のなかに閉じ込めるようなドラマを数多く創出してきた。早坂における原爆とは、その瞬間に起こった破壊・消滅を最大値として、都市が復興を果たしていくように人間の瑕も癒えていく忘却曲線上に置かれるのではなく、どんなに時間がたつても（あのとき）と（いま）が地続きのまま溶接されている状態、すなわち、（あのとき）から（いま）に至るすべてが原爆に規定されたまま宙吊りになっているような、対象化しえない記憶として認識されているのである。前述のエッセイに付けられた「時計は溶けて」というタイトルはその隠喩に他ならない。

また、「夢千代日記」、「続・夢千代日記」を書いたあと、早坂

は胃を切って静養しているとき、心筋梗塞の発作にみまわれたうえ、末期胆嚢ガンの宣告も受ける。手術を経て、一ヶ月のちに胆嚢ガンは誤診だったことが判明するが、彼はこのとき、「死に直面する恐怖以上に、命あるすべてのものへのおしさを痛いほど知った」（『現代人物誌』、「朝日新聞」夕刊、平成3・5・30）という。

その証拠に、〈夢千代日記〉シリーズを細かく見ていくと、闘病後に書かれた「新・夢千代日記」では、原爆というモチーフはもちろんのこと、人間の〈死〉そのものを思索的に表現しようとする意図が明確になっている。前二作では、あくまでも胎内被曝による白血病の発症という現在性の問題として原爆が語られているのに対し、「新・夢千代日記」では、夢千代に広島島の爆心地を歩かせ、そこに母が被曝した瞬間を「モノクロームの世界」として現出させたり、付添い看護婦として数多くの原爆症患者を看取ってきた母の友人・玉子を歴史の証言者として登場させたりして、過去の惨状に肉迫しようとする描き方がなされている。

こうした創作の背景をふまえたうえで、本稿では、「夢千代日記」、「続・夢千代日記」に描かれた諸要素を整理したうえで、特に「新・夢千代日記」の分析に重点を置き、ドラマの創作という方法によって〈あのとき〉静止した時間をあらためて動かそうとしてきた早坂の原爆に対する認識を明らかにしたい。

## 1 ギミックとしての胎内被曝と白血病

〈夢千代日記〉シリーズには、被曝者を可哀想なヒロイン＝庇

護されるべき対象として一方的に祀りあげるような力学が働いていない。また、原爆症に蝕まれた被曝者が芸者として働いているという設定も、それ以前のテレビドラマが描いてきたステレオタイプな被曝者とは一線を画している。美しい女しか演じることができない女優・吉永小百合をヒロインに据えることが前提だったとはいえ、それは大きな賭けでもあったと思われる。

たとえば、自らも被曝者である平和運動家・伊東壮が『被曝の思想と運動——被曝者援護法のために』（昭50・7、新評論）のなかで、「現実は何らかの身体障害をもつ人は全被曝者の九〇％に及んでいる。そして彼らの身体的欠陥の訴えは、戦後一五年間絶えることなく継続し、しかもその種類も極めていろいろなものにわたっている。すなわち、しばしばジャーナリズムが喧伝する白血病、ケロイドは無論のこと、癌、肝臓機能障害、貧血、白内障、健忘症、そして最も多いのは、たとえ自分の家族でも非被曝者には到底理解できないような強度の疲労感、倦怠感である」と指摘したように、被曝者たちの苦しみは、それが自分以外の誰にも理解しえないものであると感じられる点において深刻さの度合いを増す。また、当時の被曝者調査をみても、白血病や癌の発症例は急増<sup>(1)</sup>しており、そうしたデータが開示されるたびに被曝者たちはいよいよの不安に陥ったはずである。

だが、それはあくまでも被曝者たちの問題であって、一般社会に広く共有されていたとはいえない。その証拠に、たとえば、作家・椎名麟三は「白血病の責任」（『読売新聞』昭34・3・3）というエッセイで、

あの恐ろしい白血病が、私たちの知らない間に着実に増えて来ているというあまりうれしくない話を聞いた。医者から聞いたといつて友人が私に話してくれたのである。真偽のほどは知らないが、さもあろうという気の話である。すべての白血病が、あの原水爆実験のためだとはいえないが、しかし、何万カウントも放射能のある雨やら灰やらが何度も降っているから、人のうわさは七十五日式にそのときどきの新聞報道だけで消え去ってしまっている性質のものではないだろうと容易に想像できるからである。／そのとき私と友人は、ひよっとするとおたがいにもう白血病にかかっているのかも知れないといつて笑いあつたが、もちろん私たちがそういつて笑いあつたのは、恐ろしい気がしたからだ。全くニキビ患者がふえはじめているというようなユーモラスな話ではないからである。それなのにその後の死の灰や放射能雨の国民に対する影響について、政府が研究や調査の機関を設けているとも聞かないし（中略）ジャーナリズムもこのような問題にはあまり興味をもたないようなのだ。その原因は、その恐怖が一般的な性質をもちすぎ、そのせまり方があまりに着実すぎるといふ点にあるのかも知れない。

と述べている。原水爆実験によつて雨や灰に含まれる放射能を気にするばかりか、友人から聞いた「うわさ」を根拠に白血病患者が増えているのではないかと類推し、政府やジャーナリズムの怠慢によつて社会不安が増幅していると罵るこの文章は、いたずらに白血病の「恐怖」を煽るだけの駄文である。また、この文章を

書いている椎名麟三には、実際の被曝者たちがどのような苦痛・不安のなかで生活しているかという点に関する想像力が決定的に欠落している。彼の無責任な「恐怖」が「一般的な性質」へと還元された瞬間から、被曝者の固有性、被曝者として生きることの苦痛・不安は雲散霧消し、「死の灰や放射能雨」に怯える気持ちと同じものに変換されてしまうのである。

ドラマや映画のような大衆の娯楽に供することを目的とするメディアの場合、より多くの視聴者・観客を獲得するために、こうした、特殊から一般への還元、すなわち、ある特定の人間だけが不条理に苦しめられている状況を「国民」全体の苦しみであるかのように拡散させていく方法が積極的に用いられる。たとえば、被曝者が置かれている状況に迫る作品を制作するにしても、それを当事者にしか分かりえない苦しみとして描いたのでは感情移入が果たせないため、逆に、悲惨さを表現するのに最も効果的な要素は何か……という観点からの典型化がなされていく。

その常套的な方法のひとつは、当事者を画面から排除し、第三者の報告として彼らの生死を語つてしまうやりかたである。また、原爆投下直後の写真や映像と組み合わせた連鎖劇的な演出や特撮技術によつて過去を再現し、そのリアリティによつて被曝の恐怖を表現する手法もよく用いられる（「新・夢千代日記」にもそうしたシーンが登場する）。映像世界では、いわれない蔑視や差別が助長される可能性があることを理由に、マンガや活字の世界で頻繁にみかけるケロイドや脱毛をはじめとした外的症状がもののみごとに捨象されてしまう。誤解を恐れずにいえば、フィクションの領域では、ケロイド状に焼け爛れた皮膚を体现するのはゴジラ

の役目であり、生身の人間に役者がそうした特殊メイクアップで画面に登場することは回避しなければならないという暗黙の合意があり、その脆弱な善意によって、当事者自身の「顔」と「声」は画面の後景へと追いやられてきたのである。

《夢千代日記》シリーズにおいて早坂がめざしたものは、そうした当事者の「顔」や「声」を奪還することだった。そして、その目的を遂行するために彼が用いた力わざこそ、胎内被曝であり白血病だった。第一作の「夢千代日記」では、夢千代の被曝体験が次のように描写されている。

夢千代、体の工合が悪く、布団を敷いて寝ている。

夢千代の声「わたしの病気は白血病です。……三十五年前、広島でピカドンの光をあびたせいです。でも、わたしはピカドンの光を見ていません。……母の胎内にいたのです」

### 原爆の閃光

また、第二作「続・夢千代日記」になると、それがさらに白血病の発症と重ね合わされ、

夢千代「……わたしは白血病だったの」

俊子「白血病……」

夢千代「血液の癌ね……」

俊子「……………」

夢千代「なぜ、私がそんな恐ろしい病気を持っているのか、そ

のわけは、母から聞かされたわ。……この部屋よ」  
母の写真がある。

夢千代「……私の母はね、広島でピカに会った」

俊子「ピカ?!」

夢千代「原爆」

俊子「原爆……」

夢千代「わたしは、その時、お母さんのおなかの中にいたの」

という描写になっていく。「続・夢千代日記」では、この場面に続いて、「原爆のすさまじい閃光」／純白の画面が続く中で、女の悲鳴が遠く、かぼそく響いている。その純白の中から、芸者の顔がゆつくりうかびあがる」というト書きが入り、彼女が「かつて」体験した胎内被曝と「いま」罹っている白血病が接続されるわけだが、ここで注目したいのは、二度にわたって反復される「純白」という言葉である。その「純白」の画面から浮かびあがるのは、もちろん、白粉で覆われた芸者・夢千代の顔であり、彼女の純粋無垢な人間性を喚起させることになるだろうが、ここでの台詞廻しをみると、そのト書きは明らかに「白血病」の「白」とも入り混じり、あたかもこの病気が清らかで美しい衰弱であるかのような印象を与える。

胎内被曝という設定は、夢千代が「原爆のすさまじい閃光」を直接的には浴びていないという事実の証左にもなり、傍目には原爆症を発症しているようには見えないという作品内世界の黙約事項に担保を与えることになる。それは、芸者として生きていくための必須要件である容姿の商品的価値と、被曝者として表象され

るための必須要件である原爆症の発症という矛盾を同時に引き受けるために考案されたギミック (gimmick、こじ) ではドラマ、映画、小説などに用いられる仕掛け、意匠、特殊効果) なのである。

また、同様のことは白血病患者それ自体にもいえる。田山力也が「純愛映画と白血病と不倫の苦悩」(「シナリオ」昭46・5) のなかで、同時代に大ヒットした映画「ある愛の詩」に言及し、「白血病患者の少女が死んで行くのを、観客の紅涙しぼるためのダシに使うなどというのも、私にはカチンとくる」と指摘するように、この病気がドラマや映画に登場する場合、それを患うのは圧倒的に「少女」(または妙齢の女性) であり、ギミックとしての白血病患者は、かつて山口百恵が演じたテレビドラマ「赤い疑惑」から近年の「世界の中心で、愛をさけぶ」に至るまで飽くことなく反復されてきた。夏目雅子や本田美奈子といった白血病患者で亡くなった芸能人を偲ぶ言説や映像のなかで構成される美しく果敢ない女性イメージにも、それは間違いなく投影されている。

白血病患者は一般的に血液の癌と称されるが、他の臓器癌と違い早期癌/進行癌といった区別がなく、突然の病状悪化といった予測できない展開をみせる。身体にメスを入れて悪性腫瘍を切除することがないばかりか、初期の段階では身体はどこかが痛んだり急激に痩せたりする症状もみられない。その一方で、小児や若年層にも多い病気である。また、感染症を防ぐためのクリーンルームでの闘病、貧血による透き通った白い肌といったイメージが美人命の幻想と結びついて過剰なドラマ性を演出する側面もある。

もちろん、このようにして白血病患者を安易なギミックに仕立てることに對しては痛烈な批判もある。先述した田山力也などは同じ

文章で、図らずも吉永小百合という固有名詞を登場させるかたちで、「土本典昭の記録映画『水俣』」のように、ほんとに病氣と四つに取組んだ作品には私といえども感動するが、病氣をダシにした純愛映画は、吉永小百合の『愛と死のかたみに』「いらいへドをもよおす」とさえ述べている。

また、胎内被曝に起因して白血病患者が発症するというプロットが、科学的な根拠をもっているとはいえないことを認識しつつ、ドラマの効果あげるためにそれをギミックとして用いることに對して一定の理解を示す立場もある。その代表格が「胎内被曝と癌」映画「夢千代日記」より——胎児期放射線被曝による潜在性発癌損傷(「医学のあゆみ」VOL.52、平2・1) を書いた大阪大学医学部放射線基礎医学教室の野村大成である。野村は、映画「夢千代日記」が公開された際、有識者のあいだで大きな批判が巻き起こったことに注目し、胎内被曝と癌、白血病患者の関連性に関する最新の研究データを照会したうえで以下のような論理を展開している。

4年ほど前、このような美しい女性(冒頭に映画「夢千代日記」の一場面の写真を配置し、「吉永小百合が白血病患者に侵された女性の美しくもかなしい物語を見事に演じている」というキャプションを付けている——筆者注) をモデルにした映画が大ヒットした。映画のパンフレットにはつぎのように書かれている。「雪深い山陰の温泉町、湯の里で、夢千代は母から受け継いだ芸者置屋でひっそりと生きていた。もうひとつ夢千代が母から受け継いだものがあつた。それは、原爆症である白

血病で、神戸の大学病院で後半年の命と宣告されています。ところが、筆者が夢千代をはじめて知ったのは、新聞紙上であった。「映画はまちがっている。胎内被曝（子宮内被曝…母親が妊娠中に被曝すること）で癌は発生しない」と、学者たちがよってたかって非難していた。なぜなのか。／当時、ヒトでは2つの資料があった。ひとつは Stewart や MacMahon によって、独立して調べられたもので、妊娠中に胎児のX線診断を受けた母親から生まれた子供には、そうでない場合よりも、小児癌、とくに白血病の発生率が40%近く増加しているという報告で、現在でもこの報告の真偽について国連科学委などで激論がかわされている。ところが、もっと強力に放射線をあび、より正確な調査のなされている広島・長崎で被曝した妊婦の子供には白血病も含めて癌はまったく増えていなかった。したがって、あのような非難の記事が載ったのである。幼児期被曝者に白血病（0～9歳時被曝者では、白血病は実に非被曝者の17倍以上、ほかの癌は2倍強）が高率に発生しているのと対照的である。／実験動物においても、胎内被曝によつては、白血病はおろかほかの癌もほとんど発生しない。（中略）／最近、広島長崎の胎内被曝者の新しい調査結果が発表された。胎内被曝者1,630人中18人に癌が発生している。すなわち、非被曝者の約4倍の頻度である。しかもそのうち14例が成人型の癌（胃癌、乳癌、子宮癌、甲状腺癌ほか）であり、白血病は2例のみであった。被曝後40数年を経て胎内被曝者は癌年齢に達したわけで、急速にその発生率が増加するものと思われる。／胎内被曝で白血病に

なったという点では「夢千代日記」はすこしまちがっていたかもしれない。しかし、もう一度この美しい人をみてほしい。吉永小百合が白血病に侵されたほのかな命を、なんとかしてあげようと手をさしのべたくなるような美しさで演じている。かつて肺結核がそうであったように、古今東西、否、国内外を問わず、いまや白血病は美人のわずらう病気の代表となつている。アメリカで大ヒットした「Love Story」のヒロインもやはり白血病であった。「夢千代日記」では、白血病が不治の病とされてきた「癌」の代名詞として使われたものである。この美しいシーンはほかの癌ではなりたない。そこで当時、被曝後40年もたつていないのに、胎内被曝では癌は発生しないと主張しつづけた学者たちへひとこといわなければならぬ。／「negative data are not conclusive」。

〔引用に際し句読点の表記を変更している〕

野村の主張は「negative data are not conclusive.」という一節に集約されている。胎内被曝による白血病の発症というプロットそのものは「すこしまちがっていたかもしれない」が、それ以上に大切なのは、「ほのかな命を、なんとかしてあげようと手をさしのべたくなるような美しさ」をドラマで表現することであり、その「美しいシーン」を撮るための必然として用いるのであれば、それをもって「conclusive（決定的な）」欠点ということではできないという立場である。

早坂自身がこの問題に言及したことはないが、野村の主張が、結果的に早坂の本意を代弁していることは間違いないだろう。こ

の作品を書く以前から、原爆にまつわる数々のドキュメントやドラマを制作し、被爆体験者たちが書いた絵を広島平和文化センターに収蔵するための活動に率先して取り組んでいた早坂は、自身の主治医がひそかに保存していた『原子爆弾二依ル広島戦災医学的調査報告』（旧陸軍省が被爆直後の広島市に派遣した広島災害調査班と広島戦災調査班の報告書）のカルテをはじめとした多くの原爆関連資料に目を通し、生き残った人々の証言に接している。原爆災害調査委員会（ABCO）がまとめた広島・長崎での胎内被曝者に関する追跡調査に関しても、その公開を積極的に求めている。

したがって、彼が無知や誤解によってこのような事実誤認をしたとは考えにくい。好意的に解釈すれば、彼はいまなお闘病を続ける被曝者を画面の中心に置き続けるためのギミックとして、敢えて科学的には立証されていない問題に踏み込んだのであり、胎内被曝・白血病・吉永小百合という三要素による「美しいシーン」を構成したことで、視聴者たちがその「ほのかな命」に「手をさしのべたくなる」状況を作り出したのである。

この方法に対して賛否両論の意見が交わされるのは健全なことだし、当事者である被曝者がそれをどのように受けとめたのかという視点も疎かにはできない。また、こうした通俗的なドラマに仕立てあげられることで、当事者にしか分かりえない苦しみが安易な涙に転化されていった面もあるだろう。だが、その一方で、

〈夢千代日記〉シリーズがそれまでのドラマや映画とは決定的に違ったかたちで原爆投下から数十年後における被曝者の生活を描きだしたことは事実であり、ひとつの瑕疵をもって作品全体を否定することはできない。早坂は、ある雑誌のインタビューで、「非

常に上手に嘘をつくなんていうのも、才能のひとつなわけです。僕も小さい時から、空想癖があって嘘をつくの上手でしたね。親には叱られたけど。嘘が上手ければいいってわけじゃないんだけど（笑）イマジネーションとか、そういう創作の才能がなければ、まずプロにはなれないです」（早坂暁「脚本はあたかも人生のように……」、シナリオ 昭60・10）と応え、ドラマの世界では「非常に上手に嘘をつく」ことも「才能」のひとつだと語っているが、〈夢千代日記〉シリーズにおける、胎内被曝に起因する白血病というコンセプトもまた、そうした意識的な戦略として用いられたものだろう。<sup>5)</sup>

## 2 「裏日本」の地政学

〈夢千代日記〉が放映されたNHKドラマ人間模様は、昭和四十一年にシリーズ人間模様「木曜夜10時台」として始まり、二年後、日曜夜の放送に変わった際、同タイトルに変更された。担当ディレクターのひとりである深町幸男は、「社会や人生の断面を切り取り、人間の生き方を深い視点で捉えよう」というコンセプトで制作に携わり、「人間の心の機微を見据え、さりげないカットを積み上げる静的で、叙情的な作風」（鈴木嘉一「人間の心の機微を掘り下げる」「深町調」、放送文化 平12・1）と評価されている。

また、深町自身も、ジェームス三木とのインタビュー対談のなかで、「現代の『雪国』を創ってみようという話からだんだん構成されていったんです」（作家の書いた脚本そのままを表現したい……、「ドラマ」昭56・9）と語っており、放送サイドとしては、「人

間の生き方」、「人間の心の機微」に重点を置いた「叙情的」なドラマに仕上げようという狙いがあったことがわかる。夢千代は『雪国』の駒子であり、舞台は駒子の棲む閉塞的な空間でなければならなかったのである。

だが、構想段階から吉永小百合、芸者、原爆という三要素の結合を企んでいた早坂にとつて、そうしたコンセプトに応えていくことは、それほど易しいことではなかったはずである。駒子は健康でみずみずしい肉体を所有しており、島村はその肉体からほとばしる情の深さに惹かれていくわけだが、原爆症を患う芸者という設定では、彼女が何らかの病的症状に苦しむ様子を描かざるをえず、『雪国』のような「叙情性」を表現することは困難になるからである。早坂はのちにインタビュウのなかで、「……一度は独立プロで映画をつくらうというようなこともありましたが。テレビでもいろいろの機会はあったのですが、声高かに原爆はいけなないと叫ぶんじゃないくて、むきになって原爆に抗議するのはちがった、もつと丸味のある、心にしみるようなストーリーのドラマがつくれなものかなあと思いつながら、なかなかこれというかたちが思い浮かばなくて、ずっと気になっていたんですね。そういう気持ちのうへの借りを、やつと『夢千代』で返せたように思います」（インタビュウ「TVから映画へ——創作の過程を語る」、『シネ・フロント』昭60・6）と答えているが、「一度は独立プロで映画をつくらうというようなこともありましたが」という云い方そのものに、テレビドラマという制約のなかで原爆を表象することの難しさがあらわれている。

そこで早坂は、トンネルのこちら側と向こう側というかたちで

隔てられた「雪国」の世界を地政学的に援用し、明るく活気に充ちた「表日本」とそこから取り残されていく「裏日本」という図式を設定した。そして、「表日本」での生活に挫折した人間が帰ってくる場所、すなわち、繁栄・変貌する（陽）の世界に対する停滞・持続する（陰）の世界としての「裏日本」を象徴化させるために、交通の難所として知られる餘部鉄橋を結界とし、それを越えたところにある小さな温泉街を舞台に選んだ。彼はその設定について次のように語っている。

山陰のひなびた温泉町の芸者衆の話なんです。図式的に言うくと、裏日本——（今、放送ではウラと言えないんですが）今年の冬見てもわかるようにド力雪が降って、ものすごい。表日本はいつも晴れる。大した山じゃないんだけど、あの山のおかげで明暗がハッキリしている。僕は表日本の松山の人間ですけど、裏に住んでたら耐えがたいと思うのね。日本全体が雪が降るのならしいですよ。毎日の天気予報でも、日本海側は雪で、太平洋側はよく晴れています……と出るわけです。やつぱり、表日本が繁栄して、その労働力として裏日本のほうが供給している……。／表（おもて）行けば、太陽が照ってるよというので、山を越えて来る。そこでうまくいくかというところ、うまくいかないほうが多い。そこでまた帰っていく。表日本の高度成長でいろんなものは得ただけども、又、失われたものも多いわけですよ。山陰のある町で、それを失わずに残ってる人たちの、戦後日本が失ったようなものを描きたいなあと思っただけです。／あの山越えると天気が

いいんだよね、って言いながら、越えられないままの人間、越えてまた帰ってくる人間、それを、芸者という特殊な感覚で描きたいなというのがミノなんですけどね。だから、皆んな坐折した人たちばかりが集まってるわけです。

(インタビュー)「戦後日本の失ったものとウラに生きる人々」、  
「ドラマ」昭56・1)

「裏日本」をアジュール(＝避難所)として捉えていく視線は作品の細部にまで張り巡らされ、登場人物の日常会話でも、「……市駒が表日本のほうで事件をおこしたて、ほんとかいね」(「夢千代日記」)、「東京やら、表日本に出稼ぎに行つとるうち、競輪をおぼえたらしいな。いやになる程、聞いた話だ」(「続・夢千代日記」)というふうには、人間を墮落させる「表日本」というメッセー지가至るところに散りばめられている。また、三作それぞれの冒頭場面は「表日本」の神戸で診察を受けた夢千代が「裏日本」に戻ってくるシーンから始まるし、酒宴の場で芸者たちが十八番とする「貝殻節」の「ななが因果で 貝殻漕ろた 色は黒くなる 身は細る」という歌詞も作品の基調低音をかたちづくる重要な唄である。「夢千代日記」において、ある事件の捜査をする刑事が夢千代の不可解な行動を理解する場面での、「そうか癌だったのか。いや、夢千代さんがね。半年に一ぺん、汽車に乗って、表日本の方へ出かけるのが、ほんとに謎だったんですよ。きつと男がいて、その男に会いにくんだらう。そうわれわれは噂しとったんです」という台詞が象徴しているように、この作品では、「表日本」の煌びやかで刺激的な世界と「裏日本」の過酷な自然を相

手に身を粉にして働き続ける人々の暮らしがことさら対照化され、作品の展開とともに、傷ついた人間がひっそりと身を潜めて生きる場所としての「裏日本」の温泉場が濃密な空間性を發揮するようにするのである。

ただし、早坂はそんな「挫折した人たちばかり」が集まる(陰)の領域を慈しみつつも、ただ単純に質素で善良な人間たちのやさしさが溢れているように描かない。「戦後日本が失ったようなもの」を護り続けるということは、ある意味で、強固な因習や排他性が維持されているということであり、自分たちの暮らしを脅かす存在は容赦なく排除する閉塞空間としての側面もあるからである。(「夢千代日記」)シリーズには、その風土に由来する暗いエピソードも数多く挿入されているが、ここでは、そのなかから二つの場面を紹介したい。

ひとつは、かつて左千子と結婚を誓い合った泰男が、なぜ彼女と別れたのかとなる母親に言い訳する場面である。そこには次のような会話がある。

泰江「こんなところに住むのは厭だ、そういつて、はる家の左千子さんと東京へ行つてしまつたじゃないですか」

泰男「あの時は、あの時だよ。……いろんなことがあつたし」  
泰江「そうね、結婚するはずだった左千子さんが独りで帰つてきた。……なながあつたのか、母さんにはわからないけど、左千子さんが挨拶にきて、わたしは泰男さんとは結婚できる体ではありません、それだけ帰ってきました……」

泰男「ああ、そうだよ、それだけのことだよ」

泰江「それだけの?!」

泰男「だって、そうだと、子供が産めないような体じゃ、一緒に居られるわけじゃないか」

泰江「それは夢千代さんの……左千子さんのせいじゃないでしよ」

泰男「じゃ、誰のせいだよ」

泰江「……………」

若い二人は「裏日本」での生活に嫌気がさし、「表日本」の中心である東京に飛びだした。東京に行けば自由になれると信じていた。だが、いざ一緒になろうと考えたとき、自分たちが必ずしも自由な存在ではないことに気づかされる。ここで泰男が口にする「子供が産めないような体」とは、病気で衰弱しているから子どもが産めないという意味ではなく、被曝した母胎だから子どもを産むわけにはいかないというニュアンスを含んでいる<sup>(4)</sup>。そこには、井伏鱒二の『黒い雨』<sup>(5)</sup>をはじめ、数多くの原爆文学のなかで繰り返されてきた被曝者の結婚差別の問題と同時に、被曝者の女性からはどんな障害をもった子どもが生まれるか分からないという偏見に基づく遺伝差別が加わっているのである。

だが、ここで左千子を選択したのは、ひとりで「裏日本」に戻って、自ら「わたしは泰男さんとは結婚できる体ではありません」と宣言することだった。——こうした左千子の言動を差別や偏見に対する敗北的な態度と決めつけることは簡単だが、ここで大事なのは、彼女が外圧に屈してそれを受け容れたのではなく、自身自身の判断でひとり立ちする決意をしている点ではないだろう

か。誰からも詳しい事情を問われたりしない東京で暮らすのではなく、誰彼となく自分のことを噂するであろう「裏日本」の温泉場に戻って生きてきた左千子は、沈黙というかたちで不条理と闘っているのである。八住利雄は「シナリオ時評 早坂暁「夢千代日記」(「シナリオ」昭60・7)のなかで、旧ソ連の劇作家A・M・ガリーンの「私が書く意欲をそそられるのは、人間が何について語るかではなく、何について沈黙するかです」という言葉を用いつつ、早坂の個性もまたそこにあると指摘しているが、「沈黙」の思想は夢千代のなかにもしつかり息づいているといえるだろう。

ところで、アジールとしての「裏日本」を反転させていく描き方は、「新・夢千代日記」に至ってさらに前景化する。この作品では、明治末期に「西の啄木」といわれた歌人・前田純孝の晩年がサブ・プロットとして描かれ、病魔に蝕まれて山陰の故郷に帰ったにもかかわらず継母から邪魔者扱いされ、シラミと吐血にまみれて死んでいく前田純孝と、白血病の昂進に苦しむ夢千代が一冊の歌集を介して共鳴し合う展開になっている。「実際のドラマでは、現実の夢千代が恋に堕ちる記憶喪失のボクサー・タカオと前田純孝を松田優作が二役を演じている」。ここでの夢千代は、自らが日記の書き手として言葉を遺す存在であると同時に、自分の故郷で冷たくあしらわれ、孤独に死んでいく若き歌人の残した絶叫をしつかりと聴きとどける受け手でもある。

たとえば、この作品の冒頭には「山一つ越えようと、やはり空は鉛色になつている」という夢千代のナレーションに続いて、「つづくくに山陰の天は鉛そらにて 誰か明るき花を挿してよ」という

歌が詠まれる。またその直後の場面では、ハンカチに「真紅の血」を滲ませながら故郷へと向かう前田純孝の姿が描写され、「病める者世に用はなしかくの如く、我は思へり汝も思ふや」という歌が続く。作品の中盤には、歌集のなかに「骨は父に、肉は母にと返すとき、そこに残れる何物ありや」という歌を見つけた夢千代が、「私のようにもう治る見込みもない病いを抱いて、あの人は表日本から帰ってきたのです」と呟く場面があり、次のような光景が映しだされる。

海鳴りの聞える夕暮。

純孝の声「わが母は継母なり。わが実母は故あつて遠くに住めり」

離れへの庭石を伝ってくる女がある。——下駄音がカタカタと鳴る。／離れの障子戸を少し開いた。／その隙間から、寝ている純孝の顔が見える。

純孝「……………」

戸の隙間から、食膳が差し入れられた。／かゆと魚の干もの。——それだけの貧しい膳である。

純孝「母さん、悪いが寝巻を洗ってくれませんか」

戸がピシャンと音をたてて閉った。／下駄の音が、逃げないように遠ざかっていく。

純孝「肺病は早う死ぬか……………」

小さなガラス窓がある。／寝たまま外をみる純孝。

ここでの「裏日本」は、重病人が死ぬために帰ってくる故郷で

あると同時に、そんな瀕死の人間を徹底的に忌み嫌い、その存在そのものを隠蔽・抹消しようとする凶暴な世界でもある。恋人との結婚を諦めて「裏日本」に舞い戻り、いまは不治の病に侵されている夢千代もまた、前田純孝と同じ境遇にある。早坂が同書の「あとがき」に、「諸寄の家には、継母がいた。誰もが忌み嫌う業病とはいえ、純孝はロクな食事も与えられなかったようだ。（中略）／純孝は辛い日本海の一ト冬をすごし、明治四十四年九月に死んだ。血とシラミにまみれながら、それでも短歌をつくり続けている。吐血の歌といつていい。／悲しみが来て、骨かぢる。その響うつす、即ちわが歌はなる。／私は、この忘れられた歌人と、夢千代とを重ね合わせて『新・夢千代日記』を書いた。夢千代の病いも、不治の病である」と記したように、そこは「悲しみ」が集い、その「悲しみ」を唄として語り継いでいく場所なのである。

人間の欲望が渦巻き、様々な事件が繰り返される「表日本」と、閉塞的な環境のなかで声を押し殺すように淡々とした日常を送る「裏日本」という二項対立は、こうして「裏日本」の生活における更なる両義性を示すことで入れ子構造を明確にする。傷ついた人間や挫折した人間を温かく包み込む癒しの空間としての「裏日本」にも、身を寄せ合って生きねばならないがゆえの排他性や冷酷さがあることを知らしめる。「夢千代日記」のラストシーンには、夢千代が「山陰の、長い辛い冬がはじまります。気温零下五度、てんでしのぎのわたし達ですが、道連れがいます」というナレーションが入る場面があるが、ここでの「てんでしのぎのわたし達」という感覚、すなわち、それぞれがそれぞれに自分の身を護っていくことを前提とした「道連れ」という関係は、まさに「裏

日本」の両義的な世界を生き延びていくための絶対原則として提示されている。

ところで、「新・夢千代日記」では、こうした「表日本」／「裏日本」の關係が「国」の〈内〉／〈外〉の關係に敷衍され、中国大陸に進出していった日本人の悲劇が残留孤児問題として描かれる。——「はる家」で働くスミという女には戦争で夫と子どもを失った忌まわしい記憶がある。かつて旧満洲に開拓団として入殖していた彼女は、戦争末期に侵攻してきたソ連軍から逃れ、命ながら日本に引き揚げてきたが、その際、夫は「いさぎよく、自分に続いてくれ」といって「真つ先に自分でのどをつき」、彼女自身もひとりの子どもにナイフを突き刺す。だが、小さな赤ん坊だけはどうしても殺すことができず、混乱のなかで生き別れになってしまう。……作品では、中国人に育てられた残留孤児・王永春がスミの子どもとして現れ、スミは血液検査による親子の鑑定もせずに王永春の母親として生き直すことを決意する。

こうしたプロットとの関連で興味深いのは、第一作「夢千代日記」の冒頭近くに描かれる芸者たちの軍歌や中国大陸への進出を鼓舞するような唄の存在である。「突撃ラッパ」に合わせたの「デテ来ル敵ハ、ミナミナ殺せ」という叫び、声を張り上げて「……徐州徐州と人馬は進む 徐州いよいか住みよいか」、「……雪の進軍 氷をふんで どこが河やら 道さえ知れず 馬は斃れる 捨ててもおけず 此処はいずれぞ 皆敵の国」と歌う男たち。そこには、自国の経済力を拡張するために〈内〉から〈外〉へと侵攻していったかつての日本の狂信的なふるまいが戯画的に表現されている。また、戦争という枠組みのなかでその問題を捉えれば、引

き揚げや残留孤児問題は、広島・長崎への原爆投下と同じ時期に中国大陸で起こりつつあったもうひとつの出来事であったことが分かる。加害者としての日本、しつべ返しを受けた日本という視点をもつこと。それは、一方的な被害者としてのみ表象されることとの多い原爆もまた、巨視的な観点で見れば中国大陸への侵略によつて誘引されたものであったかもしれないという可能性を引き受けることであり、過去は終わっていないという事実に向けることでもある。

早坂は、のちに書いたエッセイに「無理矢理、朝鮮を日本に合併して、日朝一体を唱えたのは誰か。名前を日本名にさせ、朝鮮人は日本国民と強制したのは誰か。強制労働者として日本へ、広島へ連れてきたのは誰か——。／それなのに、日本国は朝鮮の人たちの被爆者慰霊碑を、平和公園内に建てさせないのだ。私はそうした日本人が恥ずかしくてたまらない。あの公園にある「二度と過ちは繰り返させんから、安らかにお眠り下さい」という碑の文言は、なにを意味しているのか。あの言葉には主語がないように、「過ち」の意味にも主語がないではないか（早坂暁「雨の日が好き」、「ミセス」平3・9）と記している。先述した夢千代の結婚に関するエピソードの、

泰男「だって、そうだろ、子供が産めないような体じゃ、一緒になれるわけじゃないか」

泰江「それは夢千代さんの……左千子さんのせいじゃないでしょ」

泰男「じゃ、誰のせいだよ」

泰江「……………」

という場面ともつながっている。それぞれはまったく次元の違う話題のようにみえるが、それは誰の責任なのか？ という問いの立て方をしている点において同一である。「表日本」と「裏日本」あるいは「国」の〈内〉と〈外〉といったかたちで人間を地政学的に配置してみせた早坂のもくるみには、そうした共同体的なネットワークのなかに生きる人間が「主語」を獲得していくためには何が必要なのか、という課題が内包されているのである。

### 3 〈夢千代日記〉シリーズにおける原爆

〈夢千代日記〉シリーズには、B29も原爆を投下したアメリカの影も登場しない。早坂自身が「原爆と私、そしてシナリオ——着弾地からの発想を」（「シナリオ」平7・12）というエッセイに、「放射能というのは、世代を超えて残っていくわけです。その人の子供、へたすると孫まで」、「映像とかドラマを作っていく人間は、なんとか原爆、核の恐ろしさというものをドラマで表現してやらなければいけない」と記したうえで、「踏む側の人間ではなくて、踏まれる側の痛み。これがないと僕は、極端にいうとドラマを作ったってしようがないと思います。シナリオを書いたってしようがない。ま、必ずしも原子爆弾でなくても、いろんな出来事を書いて、着弾地側の視点からすべて書いて欲しい。撃つ側の視点から書いて欲しくないですね」と述べているように、彼にとつてのドラマとは、いたずらに抵抗や告発を志向するものでは

なく、「踏まれる側の痛み」を表現することのできるメディアである<sup>6)</sup>。したがって、たとえば、「新・夢千代日記」には、

井上 「夢千代さんは、何年生まれかね？」

夢千代 「昭和二十一年の一月十日です」

井上 「二十一年の一月……。するとお母さんが広島で被爆した時はおなかにおったわけじゃから、被爆手帳は、もらえるはずだ」

夢千代 「はい……」

井上 「そうすりゃ、医療費は全部無料になるはずじゃから、

ぜひそうしなさい」

藤森 「そりゃそうした方がええ！」

井上 「お母さんの被爆手帳があるでしょう」

夢千代 「いえ……ありません」

井上 「お母さんも、被爆手帳持つてなかったの?！」

夢千代 「はい」

井上 「そりゃおかしいなあ」

夢千代 「あれは、被爆したときの証人が二人いるそうです。

母は一度広島まで出かけて行ったんですが、証人になる人が見つからなかったそうです」

といった何げない会話を通して、被曝者としてのアイデンティティや存在証明に関わる言説がたびたび登場する。

だが、先述したように、「夢千代日記」、「続・夢千代日記」の段階では、あくまでも、夢千代に白血病をもたらした原因として

原爆が断片的（あるいは隠喩的）に登場するだけであり、夢千代自身も、あの日、広島で何が起こったのかという核心の部分に足を踏み入れようとはしない。逆にいえば、そこには過去に目を背けて、過去から逃げるように暮らしている夢千代がいるのである。

そんな夢千代が広島を訪ね、あの日、母と母の胎内にいた自分が体験した出来事へと遡行していく様子を描いたのが「新・夢千代日記」である。この作品のなかで早坂は、自らの原点を捜し求めようとする夢千代を原爆資料館に立たせる。そして、そこに設置されている昭和二十年当時の「広島市の模型」を眺めているうちに、次第に彼女の身体が被爆地へと入り込んでいくような描き方をする。原爆資料館の模型を眺めている場面では、「赤い球をにらみつけている。／原爆の炸裂のフィルム。／被爆者のすさまじいケロイド。／やけどげた服。／とけた弁当箱。ガラスビン。／焼けこげた子供。女の死体——。／原爆資料館に展示されている被爆の実相——が次々と」、「それはもう地獄としか言いようのない光景でした」という紋切り型の表現にとどまっているが、その後、実際の被爆地に立ち、母とともに火の海を逃げまどった玉子がそのときの様子を語りはじめると、作品世界からそれまでの傍観的ななよそよそしさが消え、当事者の声や肉体といった身体性がいつきに溢れだすのである。

玉子

「……あん日は保代さんも私も徹夜あけで、この寮で寝とつたです。寝てすぐやっと思ひます。ピカッ！ ドカーン。……気がついたら、寮の下敷きでした。保代さんと二人で血だらけになって這い出したら、もう

まわりは火の海です……みんな、この川へ飛びこんだです。……まわりは死んだ人が一ぱい浮いておつて、川の水が見えんほどじゃつた」

沼田

「……ああ、そやつた」

玉子

「……何時間、この川につかどつたかねえ……最初は保代さんと一緒に材木につかまどつたんやけど、知らん間に保代さんが見えんようになって、保代さん、保つちゃーん、もう必死になって名前呼んでも、見つからん。……もう、保代さんは、死んでしまったと思うとりました」

夢千代「……じゃ母はこの川から這いあがつたんですね」

玉子「はい、私とはぐれて、そうなかつたんでしょね」

沼田「わしが、声かけられたところは、この川しもの京橋のところや。あの橋や」

遠くに橋が見える。

沼田「あそこで泣いとつたら、おばさんが声かけてくれたんや……。今でも、わしはあの時のこと、はっきり覚えるてるで……。一べんも忘れたことないで」

涙で目がうるんでいる。

### ●回想の橋のたもと

（モノクロームの世界）

煙がたちこめ、夕暮れのような。

ぼろぼろの布を身にまとつた若い女が立っている。裸足

だ。顔や手足から血が流れている。

——永井保代、二十二歳。

保代 「坊や。……坊や」

六歳の男の子が、上半身裸で泣いている。

顔も身体も黒く汚れている。

男の子 「……（保代を見上げる）」

保代 「お母さんは？」

男の子 「……死んだ」

保代 「誰もおらんの？」

男の子 「おらん」

保代 「……おいで」

男の子 「……手をさしのべる。

男の子 「……（うなづく）」

原爆資料館での傍観から被爆地へ、そして、そこでの語りと鮮やかに接続されるモノクロームの回想。夢千代をあの日誘うことに成功した早坂が描いた光景は、自らも顔や手足から血を流し、ぼろぼろになった身体でありながら、母親に死なれた子どもにも手をさしのべる母・保代の姿だった。そこには、被害者を被害者として屹立させるだけではなく、被害者が別の被害者に手をさしのべたり、別の被害者の役に立つことで自分自身が生きる希望を見つけていたりするような相互的な関係性が描かれている。自分が誰かの生に関わっているという確信をもつことが、その人の生にとってどれほど大きな励ましになるかという問題が提示されている。

だからこそ、この広島探訪を終えたあとの夢千代は、それまでの自分とは違った生き方をしはじめる。記憶喪失になったボクサー・タカオに恋心を抱くようになった夢千代は、彼の再起を促す場面でこんなことを語るのである。——ここでは、二つの場面からその台詞を引用したい「前者の引用では記憶喪失の状態にあるため、また「男」と表記されているが、後者では彼が自分の名前を取り戻し、「タカオ」となっている」。

I 夢千代 「どうか、私に助けさせて下さい」

男 「助けさせて？……」

夢千代 「私はもう、なおらない病気をもった人間です。助けばかり呼んでいる人間です」

男 「！……」

夢千代 「ですから、誰かの力になりたいのです。誰かを助けることが出来たら、助けてあげたいのです。助けられる間は、私はまだ大丈夫なんです」

II 夢千代 「私も自分の過去に目をそむけてきた人間です。過去を憎んできた人間です。でも今年はじめて、広島へ行ってきました。自分の目で広島を見ました。自分がどんな光をあびてきたか、母と自分の体に恐しい一撃を与えた相手を、この目で見てきました」

タカオ 「……」

夢千代 「闘う相手が、私にはよく判りました」  
少し微笑する。

夢千代 「でも、私が負けていると見えるでしょうね」

タカオ 「いや……（首をふる）」

夢千代 「まだ、私は生きてます。生きてる限りは、負けていないんですよ」

タカオ 「そうです。負けていません。ボクシングだって……」

最初の引用に関しては、夢千代を演じた吉永小百合自身もエッセイのなかで言及し、「私は夢千代のことを、完全無欠の女性——マリア様、観音様のようにとらえていました。しかし、夢千代はもっと人間っぽい女性でした。夢千代は、人に優しくすることで、自らを奮い立たせ、自分を助けるために、人を助けていたのでした。人を愛することで、自らの生を確かめていました」（『夢一途』昭63・6、主婦と生活社）と述べている。

また、ここでの「私に助けさせて下さい」という台詞は、のちに明らかにされる夢千代の出生にまつわるエピソードとも連動している。——それは昭和二十年の春、日本の敗戦はすでに濃厚であり特攻攻撃が頻繁になっていた時期である。その頃、母・保代は広島島の呉で軍艦の水兵をしていた久三と出逢う。だが、たった三度逢っただけで久三は戦艦大和の乗組員として沖繩に出撃することになる。三度目に逢ったとき、「わたしは海の底へ沈んでも、あんなのことは忘れん」と言つて別れを告げた久三を前に、保代は「わたしを抱いて下さい」、「そうすれば、たとえあなたが死んでも、あなたはわたしの中に生きています」と応える。夢千代こと左千子は、そのとき授かった子どもであり、まったく意識することなく母の生きざまを継承していたことが明らかになる。

さらに、「新・夢千代日記」では、夢千代とは直接的な関わりのない原爆エピソードが、もうひとつ玉子の口から語られている。それは次のような出来事である。

玉子 「……あの日の朝は、広島はきれいに晴れとってねえ。

その日、広島に近い町や村は、大ぜいの男手を疎開の作業のために、広島へ送り出したんだ。なかでも広島市のほうにある村では、名前はたしか斉藤さんとか佐藤さんとかいうお人じゃったと思うけど、お国の為だからと、一軒一軒、熱心にくどいて何十人という人数を集めんかった。……ところが、八月六日のその朝になって、斉藤さんは急に高い熱を出してしもうた。自分が集めた人数じゃから、どうしても出かけると頑張ったらしいけど、ひどい熱でとうとう、斉藤さんは、一緒に出かけることができんかった」

（中略）

玉子 「村の人たちが広島市の市内についた八時すぎに、ピカドンが落ちた。爆心地に近かったから、全部の人が死にんさった……。熱心にくどいて送り出した斉藤さんは、自分が殺してしもうたように自分を責めんさつて、一軒一軒謝つて歩いた。すすめた自分だけが生き残っているのが申し訳ない……」

アコ 「だって、斉藤さんはほんとに熱が出たんでしょ」

玉子 「ああ、そうなんだけど、自分の家族をなくした人は、斉藤さんは偽病で行かなかつたとか、そんな悪口まで出

るようになってしまおうてねえ……」

アコ 「どうしたの、斉藤さん」

玉子 「どうしたと思う」

アコ 「村から逃げ出したの？」

玉子 「ううん（首をふる）……。死んだ人たちの家をまわ

つて、そのの田ンぼや畠の仕事を黙って手伝って歩き  
さった……。帰ってくれと言われても、黙って田ンぼを  
手伝って廻った。どこの家も男手をなくして、田ンぼの  
仕事は手が足りん。夜も眠らんで手伝うて廻った。けど  
なあ、何十軒の田ンぼや畠を一人で手伝うて廻れるはず  
がない。……そこで斉藤さんは考えた。女の手でも楽に  
栽培できて、収入にもなる作物はないか……。それがこ  
の菜っぱです。この菜っぱは女手でも作れる。それを漬  
けものにして町へ出す。斉藤さんは一軒、一軒廻って、  
菜っぱ作り方、菜っぱの漬け方を教えて廻りんさった。  
……それが、この広島菜です。ピカドンがなかったらこ  
んなに広まっておらん菜っぱです」

ここに描かれているのは、生き残つてしまつた人間として生き  
ることの困難さである。偶然の差配によつて誰かが死に、誰かが  
生き残つてしまったとき、人々は死者を悼むと同時に、生き残つ  
た人間に対して、なぜあなたも一緒に死ななかつたのかと問うよ  
うな視線を向ける。実際にそれが言葉や態度にならなくとも、生  
き残つた人間のなかには呵責が増幅し、やがて贖罪意識にさいな  
まれるようになる。そして、多くの人間はそれに耐えられず逃げ

だす。あるいは、夢千代がそうだったように事実から顔を背けて  
見ないようにする。

早坂は「斉藤さん」という人物を通じて、自分に何ができるか  
を考えながら生きることの必要性を説いている。このエピソード  
は、それがあまりに誠実な人間を描きだしている点において過剰  
な寓意性を感じる。テレビドラマのもつ娯楽性の魅力に照らし合  
わせた場合、こうした表現は作爲ばかりが目立ってしまう危険も  
ある。だが、早坂はこうした色調で原爆を表象することにこだわ  
つた。彼はある雑誌のインタビューで、「夢千代日記」では、ど  
の登場人物も欠点やクセをもちながら、だけど人がいいというか  
善人というか、そういう人たちがばかりのような感じがしますね」と  
問われたのに対して、

まともな者がいないんです。申しわけないですけど（笑い）。  
ぼくがまともじゃないものですから。きちんとした人を、ど  
うも好きになれなくて……。でも、だらしがないといつても、  
それなりに一生懸命生きていこうという、人間のやさしさだ  
けはね。／人間、みなそうですよね、みんな欠点をもつてい  
ますよ。それで傷ついた人間が、どうやって立ち直ろうとす  
るか、です。ね。だれでも一生のうちには病気をする。同じよ  
うに心が傷ついたり、挫折することがある。そのときに、ど  
うするかが大事なんです。

（早坂暁「生きていてほしかった夢千代」、「あすの農村」昭  
60・8）

と返答しているが、この文面を読む限り、「斎藤さん」のエピソードはドラマ作家としての確信犯的なメッセージであることが分かる。彼にとつての「やさしさ」とは、いわゆる善意や良心といった心の持ちようではなく、欠点をもつた人間、挫折を経験した人間がそこから立ち直つていこうとする営みのなかで育まれる行動様式に他ならないのである。

こうした廻行体験を経て、自らの被曝体験と向き合うようになった夢千代だが、「新・夢千代日記」では、白血病がどんどん悪化し、彼女の気持ちが挫けそうになる様子も描かれる。

玉子 「……夢千代さん、わたしは身寄りもありません。働かずにお国の世話になつて寝ておるのは、わたしの性分には合いません。たまらないです」

夢千代 「死んだりしないで下さい」

玉子 「だつて夢千代さん、わたしは仕事柄、原爆症の病人を看取つてきました。あんなに苦しい思ひして死ぬのは厭です。たつた一人で、あんな思ひをするのは厭です」

夢千代 「おばさん、私も同じ病氣です。同じ病氣の人に、そんなこと言われると、私の氣持までくじけてしまひそうです」

玉子 「あなたはまだ若いんだし……」

夢千代 「もう駄目なんです、私も」

玉子 「！……」

夢千代 「あと一、二年といわれてます」

玉子 「夢千代さん……」

夢千代 「おばさん、よかつたらうちに居て下さい」

こうした会話を通じて、作品は、当事者にしか分かりえない苦しい領域に迫つていくわけだが、広汎な視聴者を相手にするテレビドラマにあつて、真実でありながら露骨にはならないような画像を構成するために彼が採用したのは、夢千代に一冊の本を取らせて、その内容から彼女の心境を類推させるという方法だつた。

夢千代が、寝たまま本を胸の上にひらいて見ている。

夢千代の声 「本を読む。……信仰も持たず頼るものもない私は、この本を読みます」

『死の瞬間』と題名がついている。

夢千代の声 「この本はアメリカの女性の学者が大勢の癌患者を見つめて書いた『死の瞬間』という本です」

エリザベス・ロス著とある。

夢千代の声 「死の病に出会つてしまつた患者は、みな一様に、わが身の不運をなげくそうです。自分だけがなぜ、こんな病にかかつてしまつたのか——誰かれにたく怒りをぶつきます。……私も、そうでした」

(中略)

丁寧の本を閉じ、まるでバイブルのように胸の上に置く。  
夢千代の声 「やがて患者は取引きをはじめます。何か良いことをすれば、助けてもらえるかも知れない……」

(中略)

夢千代の声 「患者はさらに三つの段階をふんで、最後には死

を静かに受け入れてゆくというのです」

寝床に臥せっている夢千代が「信仰」の代わりとして大切にしている本。そこには『死の瞬間』と書かれている「本来のタイトルはエリザベス・キューブラー・ロス著／川口正吉訳『死ぬ瞬間 死にゆく人々との対話』（昭46・4、読売新聞社）。脚本では『死の瞬間』と表記されているが、実際に放映されたドラマでは『死ぬ瞬間』というタイトルが映し出され、ナレーションでも原題通りに発話される。

なお同書には続篇として『続 死ぬ瞬間 最期に人が求めるものは』『昭52・11、読売新聞社』もある」。

同書によれば、末期癌をはじめとした重度の疾病によつて死を告知された人間は、当然、大きな衝撃に見まわれるが、その後の反応として、第一段階において〈否認と隔離〉（「違ふ、それは真実ではない、私のことであるはずがない」という否認と隔離（＝孤立化）による自己防衛）を行うという。だが、次の第二段階では〈怒り〉（怒り、憤り、羨望、恨みなどの諸感情を周囲にぶつける）となり、やがて〈取り引き〉（「人々ないし神に対してなにかの申し出をし、なんらかの約束を結ぶ」）ことで「悲しい不可避の出来事」を先延ばしにしようとする）をするようになるという。また、夢千代がいう更なる「三つの段階」とは、第二段階の反動としての〈抑鬱〉（「大きなものを失くしたという喪失感」や多くの夢が「実現不可能に帰する」ことへの絶望による抑鬱）、〈受容〉（「静かな期待をもって、近づく自分の終焉を見詰める」）ことができるようになった状態、〈虚脱〉（苦痛はもとより周囲環境の知覚もほとんど消えかかり、暗黒となった状態）をさす。

早坂は、この本の叙述を援用することで、日記を書きながら自分の病と向き合う夢千代の〈声〉を視聴者に届けようとしているのである。同書には、

……不安と水爆と、スピードのためのスピードと、マスプロ、マスコミ、集団人間の時代では、ごく小さな個人的贈物がふたたび大きな意味をもつてくる。贈物は相互的である。患者からは同じ苦患のさなかにある他の患者たちへの、助けと啓示と激励というかたちを、それはとる。わたしたちからの贈物は、かれらへの看護と留意、かれらのために奉仕する時間、そしてかれらの生の終わりにおいて、かれらがわたしに教えたものを、かれらとともに分かちあいたいという願いのかたちをとる。／患者たちの好意的な反応の理由として最後にあげられることは、おそらく、死にゆく人の、なにかを死後に残しておきたい、小さな贈物を与えたい、そしてたぶん不死の幻想を創造したいという欲求だろう。（中略）わたしたちはつねにかれらに告げるのである——かれらの役割はわたしたちに教えることであると。かれらの後に続く人々たちを助けることであると。

とあり、苦患のさなかにある人間にとつて、「ごく小さな個人的贈物」を「相互的」に交わすことがいかに大切であるかが語られているが、それは「私に助けさせて下さい」と懇願した夢千代の気持ちでもある。彼女は、ひとり静かに死を受け容れるための準備をはじめつつ、同時に、ほとぼるような気持ちで誰かに「小

さな贈物を与えたい」と願っているのである。「新・夢千代日記」のラストシーンには、夢千代がひとり涙にくれながら、

夢千代、雪ふる外を眺めている。

夢千代の声「二月二十日夜、涙しきりと流れる」

人のため流るる涕残るるかや

我也尊しなお生きてあらむ

前田純孝

雪はさんさんとして降り続く。

夢千代の声「夜になって大雪。春のための最後の雪でしょう

か」

とナレーションを入れる場面があるが、それは「人のため流るる涕残るるかや 我也尊しなお生きてあらむ」という前田純孝の歌に仮託した夢千代の叫びであると同時に、早坂が聴きとどけようとした原爆症に苦しむ被曝者の〈声〉だったのである。

#### 4 早坂暁における〈お遍路の思想〉

四国八十八カ所霊場の五十一番札所・石手寺に近い遍路路(愛媛県北条市)に生まれた早坂は、幼い頃から多くのお遍路を見て育った。当時、珍しかった三階建ての実家は、呉服や本、菓子などを売るかたわら芝居小屋まで併設するような商家であり、前述した通り、捨て子を置かれることもしばしばだったという。荒俣宏との対談「万物に叡智あり」(『Fode』平20・4・1・前出)で、

四国の遍路には瀕死の病人が数多くいたという話題になった際には、「実はぼくも、三歳まで足が立たなかつたんです。親が従弟同士の結婚だったので、普通でない子が生まれるかもしれんといわれていた。上の二人は大丈夫だったけど、ぼくが生まれて、おやじが「とうとう出たか」と(笑)」。／母親はそんなぼくを母乳車に乗せて、お遍路に出てくれました。三ヶ月ほどかけて八十八カ所を回ったんですが、道中みんなが助けてくれる。坂道でおじさんが負ぶってくれたり、女の人がお乳を飲ませてくれたり。で、帰ったら立ってました」と述べ、自分自身もまたお遍路によって救われたという思いがあることを明らかにしている。

その早坂が、「朝日新聞」(夕刊、昭58・11・12)の「げいのう舞台再訪」に「夢千代を死なす気はありません。人生の遍路、そう、ぼくはお遍路さんを書いてるんだなあ」というコメントを寄せたのは、ちょうど「新・夢千代日記」が放映される直前のことだった。また、ここでの「人生の遍路」という表現は、映画「夢千代日記」で夢千代の死を描いた直後、別のインタビューに寄せた次のような文面からも推し量ることができる。

「夢千代日記」というのはユートピアで、現実ばなれしているけど、夢千代という人がいて、心の温泉場があつて、あたたい人の心にふれるなかで、生きる勇氣をとりもどしていく……それが大切ではないかとね。／夢千代さんは話を聞いてあげるだけで、実際に助けてやることはできない。お金をあげられるわけでもない。ただ全身全霊で話を聞いてあげるだけです。／「小百合さん、夢千代という人は牧師だったね

え」と話し合ったことがあります。傷つき苦しむ人たちの告白を聞いたあと、夢千代さんは「いっしょに祈りましょう」というだけ。ガンになった人を直せるわけでもない。でも、でも救われる…心がね。

（生きていてほしかった夢千代、「あすの農村」前出）

この二つの言説をつなぐと、早坂が夢千代に託した思いが鮮明になる。彼は、自分に何ができるかを問う前に、まず「傷つき苦しむ人たちの告白」を「全身全霊」で聞き届けようとする夢千代のなかに、自分自身が原体験としてもっているお遍路の精神を投影しようとしたのである。

インタビューでは分かりやすくするために「牧師」という比喩が用いられているが、お遍路に置き換えれば、それは（お大師）ということになるだろう。たとえ独りで歩くお遍路でも白布や菅笠に（同行二人）と記すことで知られるように、（お大師）は、どんなときにも自分に連れ添ってくれる同行者である。早坂自身が、前述した荒俣宏との対談で、「お大師さんが亡くなるとき、泣きわめく弟子たちに「私が死んだ後も修行して歩きなさい、本当に困ったら『南無大師遍照金剛』と唱えれば、私はただちにお前たちの側に行つて一緒に歩いてやる」といったという。だから「同行二人」なんです」と説明しているように、お遍路の根底には、人はただ黙つて一緒に歩いてもらっただけで心が救われるという考え方があり、早坂自身にとってもそうした価値観が重要な意味をもっているのである。——ここでは、そうしたお遍路の思想から夢千代の存在性を考えてみたい。

佐藤久光が『遍路と巡礼の民俗』（平18・6、人文書院）のなかで、「遍路道の端には道中で命を落とした遍路の墓が残されている。遍路の途中で病気や、体力の限界で命を落とす人は少なくなかった。また、何らかの事情を抱えて国元を迫られた人々は一生遍路を続け、いつかは死を迎えることになる。（中略）村人は遍路の死体を手厚く遇する念と、他方度々死亡者の墓穴掘りや墓の建立の負担で板挟みでもあった。村人たちが墓穴を掘つて埋葬し、墓を建立した慣習や、遍路墓の多さは四国遍路の習俗の特徴でもあった」と述べているように、四国遍路の特徴は「何らかの事情を抱えて国元を迫われ」た人間たちと彼らを迎え入れる「村人」たちが濃密につながり合うような習俗が、延々と継承されてきた点にある。

お遍路のなかには、「一生遍路を続け」たのち、旅の途上で「死を迎える」人々も数多くいた。日常に復帰するために何かを祈願したり償いをしたりするのではなく、遍路そのものを人生とし、漂泊のなかで朽ち果てていくような生があった。そして、遍路道の「村人」たちは、「死亡者の墓穴掘りや墓の建立の負担」に悩まされながらも「遍路の死体を手厚く遇する念」を育み、この世で最も虐げられた人々、排斥された人々を信仰の対象とした。その意味で、お遍路という習俗は無為を有為に変換していくシステムでもあったのである。

お遍路の特性については、早坂自身も、自ら編んだ『日本の名随筆 別巻21 巡礼』（平4・11、作品社）の「あとがき」で、「巡礼」といい、遍路といい、宗教的な衣をまとったものは、多少なりとも、守られての旅となるが、これが「遍歴」「漂泊」「放浪」

ともなると、どうだろう。もつと危険と刺戟に満ちた旅となり、山頭火ではないが、「みんな帰る家のある夕べの行き来」と駅頭に佇むばかりなのだ」と記し、「漂泊」や「放浪」を続けたのちに斃れていく人々への哀切を語っている。また、前述した荒俣宏との対談では、「戦前の遍路というのはすごく陰鬱だったんです。いまもそうですが、まず遍路は深刻な病の人が回るわけです。昔はハンセン氏病が野放しになっていて、まわりに感染すると思われていた。だから家族から病人が出ると、お金と遍路装束を渡して「四国に行きなさい、あそこなら生きていけるから」と放逐するようなことがあったんです」と説明したあと、

……ぼくらは子どものころに「無財の七施しちせ」というのを教わりました。席を譲る、荷物を持ってあげる、笑顔を見せるといったもので、お金がなくても他人に対して七つの施しができるといふ。それを千年、実行している。遍路道の人には「お遍路さんは自分の身代わりだ」という思いがあるんです。いつか自分も不幸・不運に行き当たって歩くことになるだろうけど、いまはあの人歩いている。<sup>⑦</sup>

とも述べている。そこにあるのは、お遍路のなかに未来の自分を探して、彼らが蘇生していくために力を尽くすことで自分自身も蘇生していくこうとする相補的な人生観である。早坂におけるお遍路の思想とは、庇護する側とされる側が自在に入れ替わり、庇護することとされることが同時に起こりえたりするものなのである。

こうした資質をもっている早坂が、〈夢千代日記〉シリーズについて「ぼくはお遍路さんを書いてるんだなあ」と語ったことの意味は大きい。従来のテレビドラマであれば、夢千代はむしろ周囲の人間の優しさに支えられる存在としてお遍路の側に置かれたであろうが、彼はこの作品において、むしろ、山陰の温泉場に流れ着く挫折者たちにお遍路を投影し、「はる家」を遍路宿に、夢千代を〈お大師〉に見立てることで、そうした安直な被曝者イメージを解体しようとしている。死期が近づいていることを知りながら誰かの生に関与し続けようとする夢千代を通して、人間同士が救い救われていく循環性を描いている。(夢千代日記) シリーズ以降の早坂は、映画「夏少女」に被曝の痛みを持つ者にしか見えない少女を登場させたり、舞台劇「私を忘れないで」に、原爆が契機で記憶喪失になった男と男の過去を蘇らせようと尽くす妻を描いたりして、原爆というモチーフに、見えないものを見ようとし喪われたものを取り戻そうとする人間を重ねてきたが、それはまさに「同行二人」の叡智から学んだものであり、夢千代というヒロインはその原点にいたのである。

## 5 憑依する吉永小百合

では、その早坂に夢千代というヒロインを想起させた女優・吉永小百合の魅力はどこにあるのか。そして、彼女自身にとつて、被曝者である夢千代を演じることはどのような意味をもっていたのか。『吉永小百合の映画』(平16・9、東京書籍)を書いた片岡義男が、

——デビュー作の『朝を呼ぶ口笛』で、昼間の高校への進学をあきらめ、職について夜間の高校に通う選択をした少年に、「ガンバレ」と紙に書いて手渡した少女は、昼間の高校への進学をあきらめ、職について夜間の高校に通う選択をした、明るく元気に頑張る『キユーポラのある街』の少女となった。その間に出演した二十六本の映画は、体験となつて少女の内部に蓄積され、この作品では余裕として画面にあらわれている。(中略) どんなときにもくじけることなく、常に明るく前向きに元気に頑張る、というキャラクターは、映像上の吉永小百合と違和感なくきれいに一致したようだ。その一致ぶりを観客は賛意をもって認めた。

と述べたように、デビュー作以降の青春映画において吉永小百合が演じた役柄は、「どんなときにもくじけることなく、常に明るく前向きに元気に頑張る」ヒロインであり、スクリーンのなかの彼女は誰にも媚びることなくツンとした表情で仲間たちを励まし続けていた。

また、昭和三十九年、東京オリピックの直前に封切られた「愛と死をみつめて」<sup>(8)</sup>では、軟骨肉腫という難病を克服するために、恋人に励まされて顔の左半分を切断するという手術に挑むものの、病魔の進行によつて死んでいく女性を演じて大ヒットしているし、昭和四十一年九月に封切られた「愛と死の記録」では、幼いときに被曝していることに苦しみ、結婚を諦めようとする恋人に「うち、待つとるよ。いつまでも待つとるよ」と訴えて彼を支

えようとし、青年が亡くなったのちその後を追つて自死する女性を演じている。<sup>(9)</sup> (夢千代日記) シリーズの頃、すでに主演映画が百本近くに達するほど様々な役柄を演じていた吉永小百合であるが、そのなかでも特にヒット映画となった作品には、励まし／励まされながら苦難を越えようとするヒロイン、あるいは、不条理な死に引き裂かれていく愛といった系譜がはつきり読みとれる。

だが、青春映画路線から退き、着物の似合う女優に変貌(昭和48年8月に岡田太郎氏と結婚し、一年間の休業をした後、このような傾向が強くなっていく。女の情念を表現するために濡れ場などにも挑戦するようになるが、そうした作品はことごとく失敗している) してからの吉永小百合が、かつてのような輝きを喪い、文芸映画や豪華キャストでの大作によつてかろうじて話題になるといった程度の人気に凋落していたことも事実である。彼女が早坂暁のもとを訪ねて(「自分のために」何か書いてほしい)と申し出たのは、まさにその時期だったといつていいだろう。逆にいえば、吉永小百合は(夢千代日記) シリーズを演じるることによつて、自分がスクリーンのなかで最も輝いていた時代のセルフ・イメージを取り戻し、いくら歳をとつても変わらない永遠のヒロインという立場を獲得したのである。

早坂はそんな吉永小百合について、「……あの人はむずかしいんです。働いている女性、たとえばOLなんかもピタツとしない。ホームドラマの奥さん、これもやれなくはないけど、もひとつピタツとこない。非常にリアリティの強くない人ですから、物語にするのがむずかしい。／しかも、いつも健気に耐えているといった印象がある。昭和の初期とか戦前の、そういう時代ならいいけ

ど、現代でどういふのが小百合さんにピッタリするのかなと、考えたわけです」（生きていてほしかった夢千代）、「あすの農村」前出）と述べている。吉永小百合という身体は、まさに、愛と死を極限にまで煮詰めないと「リアリティ」を獲得できないような扱いの難しい存在だったということである。

吉永小百合を甦らせた早坂の手腕は、「TVドラマ「30年のベストテン」」という文章を書いた放送評論家・滋賀信夫にも認められている。彼は「吉永小百合という人は、それまで一度も演技賞をもらったことがなかったが、モナリザのように多面的に解釈できるもの悲しさを湛えている。そのキャラに、原爆を背負った日本人の哀しさが重ね合わされることで、日本特有の「昇華されたセンチメンタリズム」が生まれ、視聴者の大きな共感を生んだんです」（『週刊新潮』平19・8・16・23）と述べ、〈夢千代日記〉シリーズにおける早坂の脚本と吉永小百合の演技が相俟って「昇華されたセンチメンタリズム」が生れたことを評価している。

だが、はたして事はそれほど単純だろうか。「原爆を背負った日本人の哀しさ」とはいったいどのようなものであり、吉永小百合演じる夢千代のどこにそれが表出しているのだろうか。この問題を考えるために、ここでは「新・夢千代日記」の一場面を例として紹介しよう。——それは、被曝者であるがゆえ恋人との結婚を断念し、いまは白血病まで発症している夢千代が、恋人だった男の母親から両手を包まれながら「可哀そうに」といわれる場面である。

泰江 「ほんとだったら夢千代さんはうちの泰男と一緒にな

っとった人です。……あなた達は私に何の相談もなしに別れんかった」

夢千代 「あれは……」

泰江 「判つとる。原爆の……白血病のことでしょう。でもねえ、私は今でもあなたを自分の嫁のように思うとる……」

……

夢千代 「私は結婚出来る体ではありません」

泰江 「夢千代さん、私はあなたが好きなのよ」

夢千代の手を両手で包むようにした。

泰江 「……可哀そうに」

夢千代 「おかみさん……」

ここでの対話は、いつけん、夢千代の境遇に同情する泰江と泰江の気持ちとがありがたく受けとめる夢千代が気持ちをひとつに寄り添わせる場面のようにみえる。だが、脚本家としての早坂の妙技は、ふたつの感情がひとつに溶解していくように見せながら、同時に、「……可哀そうに」などという安っぽい言葉しかかけてやれない泰江のもどかしさや、「おかみさん……」と言ったまま沈黙してしまう夢千代の言葉にならない思いも織りこんでしまうところにある。優しい言葉をかけ、気持ちを分かちあおうとすれどするほど当事者と非当事者のあいだにある断層がせりあがり、お互いを決定的に隔ててしまうような逆説性。それがこの場面の魅力であり、原爆の痕跡は「……」でしか表記できないものとして澱のように沈められているのである。

だが、すでにあからさまな記号性を身にまもってしまっている

吉永小百合の演技は、むしろ、そうした理解不可能なものを理解可能なものに変換してしまう。被曝者を生真面目に演じれば演じるほど、それが個別の人間の「哀しさ」としてではなく「日本人の哀しさ」のように見えてしまう。この作品の彼女は、たしかに「モナリザのように多面的に解釈できるもの悲しさ」を湛えていたかもしれないが、それは同時に、語りえないものを雄弁に語ってしまうような通俗への接近でもあったのである。

こうした吉永小百合の存在性についての確な指摘をしたのが吉田司である。吉田は「還暦 吉永小百合と戦後」、「週刊朝日」17・8・19・26)のなかで、映画監督・篠田正浩の「吉永クンの面白いところは、日本の女性の最も典型的な、貞操たな、淫乱でない、操の高い女性を演じることが自分の役割だと見極めたことです。夢千代のようにどんなに淪落しても、彼女のバージニティは棄損されない(笑い)。いわば戦後のアメリカニズムに対して、日本の女として生き延びた」というコメントを紹介したうえで、「《永遠の清純派》と呼ばれる吉永小百合も、なんやかやけつこう戦後過程にシンクロして、すっかり生臭く生きてきた女優だった」と指摘し、「最近の彼女の本質」についても、「むしろ全国を回って『原爆詩』を朗読し、『被爆民族』という国民的物語を伝え歩く吟遊詩人の姿の方にある」と喝破する。

また、「原爆詩」を朗読する吉永小百合がしばしば夢千代を引き合いに、「よく、どうして原爆の詩を読むのかと聞かれます。それは、まだ自分の中に夢千代の残像が残っているからでしょう」と語りつつ、同時に「私たちはあきらめずに、核兵器を二度と使つてはいけなさと訴え続けたいといけません」といった発言

をしていることにも着目している。

ここで考えたいのは、「夢千代の残像」と反核への願いは具体的なロジックもないまま吉永小百合という身体で接続され、聴衆を納得させてしまうことの問題性である。彼女の「訴え」は、早坂が「新・夢千代日記」に含意させようとした日本の侵略行為や残留孤児問題、あるいは、戦後の日本人自身が被曝者に向けてきた様々な差別、偏見、蔑視といったものを忘れさせ、あたかも「被爆民族」としての日本人をひとつの「国民的物語」に集結させるような磁力をもってしまうからである。吉田司は上記の文章に続けて、

90年代のバブル崩壊↓「失われた10年」↓「負け組・勝ち組」デフレ・リストラ地獄の中で、日本人が経済成長をベールに築いてきた(戦後の価値)はポロポロに砕け散った。「全中流」サラリーマン家庭は崩壊し、若者の「平和意識の空洞化」が叫ばれる中で、吉永のその孤軍奮闘ぶりは(戦後)を守る「最後の砦」のようだ。/ただしこうした「戦争体験(被爆)の伝承」運動の問題点は、若者の平和意識の欠如だけではないことをキチンと指摘しておこう。/それはヒロシマ・ナガサキの悲惨、無惨という(被害者)の視点ばかりが強調され、当時の「大東亜聖戦」を日の丸提灯行列で熱狂的に支持した日本民衆の(加害者)の構造がネグレクトされがちなことだ——いわばヒロシマ・ナガサキを「戦争責任問題」から解除して、聖化する傾向が目立つのだ。/「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で女優の吉永小百合さんが、原爆詩を

朗読した。『朗読が被爆者を元気づけ、さらに自らの体験を手記や詩として残すきっかけにしてほしい』との吉永さんの思いを尊重した結果、この日の出席者は約90人の被爆者に限られた。(05年7月3日、朝日新聞) / ここでは、被爆体験が聖別され、吉永は「平和の女神」でもあるかのようだ。いま小泉首相の靖国参拝や日本人の「改憲ナシヨナリズム」の高揚にアジアが反発し、日本人の戦争責任がふたたび大きく問われ始めているこの時に……、である。

と述べているが、自らを夢千代に憑依させるかたちで、被爆体験をすべての国民が共有する物語に仕立ててしまう吉永小百合の語りは、それが美しく果敢なげであればあるほど、多くの聴衆の涙を誘えば誘うほど、別の弊害を生む。誰かの役に立ちたいと願い、誰かを救うことで自分自身も救われる被爆者を造形し、被爆者がその痛みや苦しみを自らの(声)で語ることに意味を求めた早坂の狙いは、吉永小百合という拡声器によってドラマと現実の垣根を越えてしまい、夢千代のように生きられなかった大勢の被爆者たちの体験・記憶を抹消していく働きをしているのである。

吉永小百合という女優が自らの意思で原爆詩の朗読や核廃絶運動に参加していくことはまったく自由であり、それ自体を問題にするものではない。しかし、夢千代という虚像を身にまといながらそれを語る彼女のやり方は、夢千代に被爆者を代表させることになりかねない点において、少なくとも、ドラマにおける夢千代の生き方を裏切っている。「夢千代日記」のなかで、寒々とした日本海の荒波を背景に語られる、「幸せはみなひと色だけ、不

幸は一つ一つちがった色をしているそうです。私を含め、わがはる家にいる芸者衆が、なぜ芸者になったかは、一人、ひとり、ちがいます」という夢千代のナレーションになぞらえていえば、そこには、「一つ一つちがった色」をしているはずの「不幸」をみんなの「不幸」に塗り替えてしまうような偽装が無自覚になされているのである。

## 注

- 1 テレビドラマ、映画では吉永小百合の当たり役となっているが、舞台化に際しては、三田佳子、多岐川裕美、大空真弓、姿晴香、大月みやこといった多彩な人々が演じている。
- 2 たとえば、日本原水爆被害者団体協議会がまとめた『原爆被害者調査』第2次報告「原爆死没者に関する中間報告」(昭63・3)は、「病氣」はどの時期においても死因の大部分(八四〜九四%)を占めるが、病気のうち、白血病と癌については、「白血病」(と遺族が見なしている症状)は二〇年代、三〇年代の死者に発生率が高くなっている。また、「癌」になった者は、二一〜二九年の死者の一三%、三〇年代死者の二六%、四〇年代死者の二九%、五〇年代死者の三一%であり、三〇年代以降から急増し、次第に漸増する傾向をみせている」と記している。
- 3 胎内被曝と白血病の発症に関する科学的な調査・研究がどのようになされてきたかという点について、ここで報告しておく。

ROBERT HEYSEEL, A. BERTRAND BRILL, LOWELL A. WOODBURY, EDWIN T. NISHIMURA, TARUNENDU GHOSH, TAKASHI HOSHINO(星野孝), MITSURU YAMASAKI(山崎満)「広

島原爆被爆者に於ける白血病「原爆傷害調査委員会、昭34・3）には、「広島」の白血病資料をかねて検討した結果、被爆後数週間間に於て強度の放射能徴候並びに症状を呈した生存者中に白血病発生率の増加を観察したことが強調されている。放射能徴候は、有意な放射線量を受けた集団を他のものと区別する方法として此の強度の放射線を受けた集団の白血病発生率と、少い放射線量を受けた集団の白血病推定発生率との比較を可能にするために用いられた。症状によつて分類された近距離被爆生存者集団に於て、白血病発生率の増加が認められた。基本標本に於て、1,500米以内の距離で被爆した後主要の放射線徴候或いは症状を呈しなかつた6,938の生存者の集団で、9症例の白血病が確認され、その発病は昭和25年より昭和32年に至る期間中であつた。死亡或は移動による人口の減少を無視した場合、此の大きさの日本人非被爆者集団に発生する白血病症例の最大予想数は1.66である。白血病症例の発見数と予想数との相違は、統計学的に極めて有意であるといえる。(中略) 2000 m未満で被爆した白血病患者に見られる慢性骨髄性白血病の頻度は他の被爆条件によるものと比較すると、著しい増加を示している。(中略) 近距離被爆者群に於ける慢性骨髄性白血病の患者数は予想される数より有意の差をもつて著しく大である」という報告がある。また、この報告は血液研究の分野でも承認され、朝長正允「他」「原爆被爆者の白血病の20年間のまとめ」附：日本の白血病疫学の一側面」(九州血液研究同好会誌) 昭42・12)における、「原爆被爆者白血病に関する報告は、すでに相当数にのぼる。発生様相の解析は報告書により、それぞれ異なつた方法が用いられているが、近距離被爆者の白血病発生率が増加

し、発生と線量との間にはその曲線の型には議論の余地があるが相関があるという結論はすべての報告が一致している」という指摘、あるいは、伊藤洋平編『白血病』(講談社、昭49・6)の「腫瘍性病変のうちで白血病は原爆放射能との因果関係が、最も明らかに立証されている疾患であるが、相当量の放射能を浴びた被爆者に白血病が多発するであろうということは、前記の放射線従事者における白血病発生率の上昇、あるいは後述の放射線照射による動物での白血病誘発実験の結果などから、専門家によつて早くから予期されていたことであつた。本人口集団については山脇が1946年から1951年に至る詳細な統計的調査を行ない、原爆被爆と白血病発生との関係性を初めて指摘した。その後、この調査は渡辺ら、朝長ら、あるいは原爆災害調査委員会(ABCC)によつて継続的に報告されている(中略) 1946年から1970年末までの過去25年間に広島市で発生した白血病症例の総数は300例で、そのうち被爆例は170例に達している。したがつて对被曝人口10万人の平均年間発生率は7.54で、非被曝人口の約3.5倍である。白血病は現在致死性であるので、その死亡率もほぼ同様の数字を示している。これらの症例の発生率を3年ごとにまとめて追つてみると、(中略) 1946年、すなわち被曝の1年後から急激な上昇がみられているが、その大半は被曝症例である。この傾向はその後約20年間持続し、ことに1950年から1955年にかけてピークを示した。この間の非被曝例の対人口10万人の平均年間発生率が約1.1なのに対して、5000 m以内での被曝例のそれは約10に達した。とりわけ被曝線量が100rad以上だつたと思われる1500 m以内での被曝人口における発生率は70以上を示し、被曝線量と発生率との相関が明

らかに示されている」という論説などにつながっている「上記引用に際して、句読点の表記を変更している」。

このことから、近距離被爆者の白血病発生率は基本的に「線量」と相関的な関係になっており、近距離でより大量の放射線を浴びた被爆者ほど慢性骨髄性白血病の発症者が多くなることは事実のようである。だが、ここで注意しなければならないのは、上記のデータはすべて直接的な被爆者に関するデータであって、胎内被曝と同列に扱うことはできないという点である。

そこで、胎内被曝と白血病の関係に関する研究をみていくと、例えば、加藤寛夫、ROBERT J. KEHN は「胎内被爆生産児の死亡率 広島・長崎」（『広島医学』昭45・9）と、「MacMahon (MACMAHON B.) X-ray exposure and childhood cancer. J Nat Cancer Inst 28:1173-91, 1962 [出産前のX線照射と小児期の癌]……筆者注）は、母親が妊娠中腹部または骨盤部X線照射を受けた者の子供に、白血病およびその他の新生物の発生率が高いことを報告した」とあり、William J. Blot・清水由紀子・加藤寛夫・Robert W. Miller「胎内被爆者の結婚と出生」（『広島医学』昭51・7）には、「人間の胎児に放射線を照射した場合、著明な影響を誘発することは以前から知られている。妊娠初期に高線量の治療用放射線照射を受けた婦人の子供の50%以上に中枢神経系損傷のあったことが1929年に報告された。妊娠初期の胎内被爆者に関する以前の調査では、被曝線量の増加に伴い、小頭症と知能遅滞の見られる子供の有病率が著しく上昇している。小児の白血病による死亡率を検討した多くの調査の中で最も大きい調査では、妊娠期間中に診断用（低線量）放射線に被曝した母親の子供の死亡率が増加が認められている。

生殖細胞の放射線感受性は神経細胞またはその他の細胞とは相当異なるかも知れないが、このような調査並びに動物実験より得た所見では、妊孕力に大きな放射線誘発性変化の起こる可能性のあることが分かった」とある。つまり、妊娠母胎の腹部や骨盤部にX線を照射した場合、その後に生まれてきた小児には中枢神経系損傷とともに白血病を発症する危険が著しく高まるというわけである。

それぞれの研究はまったく別々の状況でなされたものである。一方は広島と長崎における被爆者の実態調査から浮き彫りになったデータであり、もう一方は、妊娠母胎への放射線照射を個別に繰り返すなかで得られたデータである。したがって、上記の調査だけでは、広島・長崎の原子爆弾で母親が放射線を浴びた胎児が、その後、白血病を発症する危険性がどの程度高まったといえるのかを証明する根拠にはならないということが分かる。

ちなみに、昭和三十三年九月二十二日付の「朝日新聞」には、「母胎内で二次放射能? 広島少年、初の犠牲」という見出しのもと、広島原爆病院に入院していた十一歳の少年が急性骨髄性白血病で亡くなったことが報じられているが、その文面は、「広島に原爆が落ちた二十年八月六日健二君は母親みとよさん（四一）のお腹の中（妊娠五カ月）におり胎児が第二次放射能（原爆からの直接の放射能でなく、中性子線で二次的に生じた放射性物質と原爆破片による放射能）を受け原爆症となった臨床例の報告はなく、広島原爆病院でもはじめてのケース。母親みとよさんは被爆の翌七日肉親を探すため広島市に入って爆心地付近を何度も通り、同市宇品町で二泊、また十二日から六日間滞在していたので、この

間に第二次放射能を受けたものとみられる。／健二君は出生後余り変ったこともなく成長したが、昨年十一月ごろから体の調子がおかしくなり、さる五月広大付属病院で原爆症と診断されて入院、さらに呉市内の病院を経て九月六日広島原爆病院に入院した。死亡直前の白血球は一立方ミリ当り三〇一（普通六―七〇〇）赤血球一七二万（同三五〇万）色素素三六％（同九五％）にそれぞれ減っていた。なお母親は元気で健康に生活している」となっている。

4 事実、〈夢千代日記〉シリーズには、左千子が自分の子どもの位牌を大切に保持している様子が描かれており、彼女が泰男の子どもを身ごもったにもかかわらず中絶（作品ではそのあたりの事情が詳しく描かれていないが、子どもが生後亡くなったようには描かれていないため、中絶の可能性が高い）した過去があることがわかる。

5 「黒い雨」は昭和四十年一月から翌四十一年九月まで「新潮」に連載されたが、当初（昭和40年7月まで）は「姪の結婚」というタイトルであり、姪・矢須子の「被爆日記」を清書する重松が、彼女の結婚の障害になりそうな事実（＝「黒い雨」を浴びたこと）を隠蔽していく過程が描かれている。

6 早坂における「着弾地からの発想を」という考え方は、ある意味で被害者の立場を絶対化するものであり、誰がそれを投下したのか、なぜそれは投下されたのかという視点からは遠ざかることにつながる。それに対して、たとえば平成十九年七月に公開された記録映画「ヒロシマナガサキ」（原題「White Light / Black Rain」）同8月6日からはアメリカ全土のケーブルテレビでも放映され、

大きな反響を呼んだ）を撮った日系アメリカ人の監督／ステイブン・オカザキは、「絶望的な断絶しか残らない議論はやめ、目撃者の物語を聞こう」（『窓 論説委員室から』、「朝日新聞」平19・9・5からの引用）と語り、原爆を投下する側と投下される側、それぞれの視点を並列することによって見えてくることを問題にしている。

7 ここでの「無財の七施」とは、家を宿に貸す、席を譲る、体を使って困った人の手助けをする、いつも笑顔を絶やさない、温かい言葉をかける、優しいまなざしを送る、思いやりの心をもつ、…以上の施しをさす。

8 原作は大島みち子／河野実の往復書簡集『愛と死をみつめて 純愛の記録』（昭38・12、大和書房）。2004年版『出版年鑑』によれば、同書はわずか一年間で一三〇万部を売り一冊の単行本として「戦後最大」を記録したという。また、吉永小百合はこの作品で国民映画賞主演女優賞、ゴールデンアロー賞、ブルーリボン大衆賞を受賞している。

9 この作品も、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』に紹介された実際のエピソードをもとにしている。吉永小百合は『夢一途』（前出）で、この映画の思い出として二人が原爆ドームのなかで抱き合うシーンをあげたうえで、撮影がすべて終わったあとになつて、「会社の偉い方」から「原爆ドームを入れたカットは、全部削るように。それからケロイドの顔が出ているところもだ」という命令が下り、すべてカットされたことを告白している。

※ 本文中、原子爆弾の直接的な被害をさす「被爆」と、その放射能

にさらされたことを示す「被曝」とを厳密に区別し、引用部分以外、それぞれの表記を用いている。

※ テレビドラマを論じる場合は、脚本のみならず、演出、撮影など様々な角度から総合的に批評する必要があると考えるが、本稿の目的は早坂暁の脚本に限定して論を展開することにあるため、演出その他の要素に関してはほとんど言及していない。また、本稿はテレビドラマとしての〈夢千代日記〉シリーズをテキストとしたため、同じ早坂暁の脚本であるものの、映画版「夢千代日記」に関しては言及していない。ちなみに、映画版の監督をした浦山桐郎は雑誌のインタビューで、「いま原爆の被爆体験自体が風化していますですよ。だから今回は物語のひとつの象徴的な重みとしてしか扱いません

ん。(中略) 夢千代さんは赤ん坊のときに受けた傷だから、体験とは言えませんか。そこが戦争を描くにしては弱いところですよ。だから、原爆のことをリアルにいろいろ描いてみても、観念的なものに終わる恐れがあるんですよ」、「『夢千代』の場合はもつと個人的でもつとわびしい問題ですから、民族の被爆体験を謳うというようなものにはなりません。そうじゃなくてひとりの女のなかに被爆の悲しみが静かに出てくればそれではないかと考えています」(「テレビと映画ではどう違うか見比べてほしい『夢千代日記』」、「シネ・フロント」昭60・6)と答えるなど、吉永小百合の規定路線である愛と死のテーマを中心に画面を構成し、被曝者としての夢千代像を後景に退けている。